JAIA創立60周年記念イベントin奈良特集

輸入電動車の現在・過去・未来をつなぐ

インポーター9社から25台がずらり

日本自動車輸入組合（JAIA、ゲルティンガー剛理事長）は11月26日、創立60周年に合わせて、輸入電動車のデジタルトランスフォーメーション（DX）・グリーントランスフォーメーション（GX）の取り組みをアピールする記念イベントを奈良の薬師寺で開催した。インポーター9社が電気自動車（EV）や燃料電池車（FCV）など25台を並べたほか、カーボンニュートラル（温室効果ガス排出実質ゼロ）につながる輸入車電動車に関わる取り組みなどを発信した。

国際交流の原点 薬師寺をスタート地点に

ラインアップは5年で大幅に拡大

JAIAによると、会員各社の輸入EVのラインアップは2020年10月時点では10ブランド、20モデルだったが、25年10月には乗用、商用を含め22ブランド、173モデルに拡大した。ラインアップの拡大に合わせて、ユーザーの選択肢は増え、輸入EVの販売は確実に増加傾向にある。JAIAでは、カーボンニュートラル対応やユーザーニーズの深化に応える技術の進展を背景に、DXやGXの必要性は今後一層増していくとみており、さまざまな課題に対応していくことを目的に21年に「輸入電動車普及促進プロジェクト」を立ち上げた。同時に、業界や一般向けに電動車普及促進を目的としたイベントを展開。21年に東京、22年は大阪で開催。23年の神戸、そして24年の東京は一般向けに行った。神戸は旧居留地、東京では、丸の内エリアでビジネスパーソンや観光客ら一般ユーザーに向けて輸入電動車の魅力をアピールした。

DXやGXへの取り組み発信

次の10年への羅針盤を掲げ

今年は再び、業界関係者らに向けて「輸入電動車のDX・GXの取り組み 現在、過去、未来、JAIAがつなぐモビリティのメモリー・羅針盤@薬師寺」として実施した。ゲルティンガー理事長は「現在・過去・未来をキーワードとして、国際交流の原点であるここ薬師寺からJAIA会員と関係者の皆さまと心を一つにここ10年の歴史を振り返り、次の10年への羅針盤を掲げ、ともに歩みを進めていきたい」とあいさつした。

プログラムの目玉の一つとして薬師寺の白鳳伽藍エリアの食堂では創立60周年トークセッションを行った。正会員や賛助会員と自動車ジャーナリストの清水和夫氏が自動運転や最新技術、バッテリーリサイクル、水素技術に関する動向などについて、入野泰一副理事長兼専務理事がモデレーターとして話を進めた。

また、同イベントでは輸入電動車のアピールにとどまらず、電動車の普及につながるさまざまな取り組みも紹介した。その一環として充電や水素充てんのインフラを手がける賛助会員なども参加したほか、使用済みの駆動用電池のリサイクル技術なども紹介した。

JAIA幹部と経済産業省の前田洋志参事官、国土交通省の堀江暢俊課長ほか来賓の皆さま

同乗試乗会も 最新モデルの走りに注目

最新機能を体感

そのほか、イベントでは、自動車評論家による輸入電動車同乗試乗会も開催した。来場者らは薬師寺周辺の高速道路での自動運転機能や先進安全運転支援システム（ADAS）を体験した。紅葉が深まる古都・奈良に最新の輸入電動車が走る姿にカメラを構える歩行者や観光客も見られ盛り上がりをみせた。

JAIA賛助会員の展示

日本自動車輸入組合 ゲルティンガー剛理事長

持続可能なモビリティ社会に貢献を

JAIAは会員インポーター各社とともに電動車普及PR活動、充電インフラ整備などの環境整備に注力している。電動車の認知向上を目的としてスタートした主催イベントは東京や大阪、神戸で開催してきた。多くの皆さまに輸入電動車を知って体感していただくことができたと考えている。

そして今年は1300年前に文化と技術が交差する国際的な交流の場であった薬師寺で開催することができた。薬師寺が大切にしている安全祈願はわれわれと共通する思いだ。

いま、DX・GXが自動車業界のキーワードとなっているがBEVとSDVは親和性が高いと評価されている。今後のモビリティの進化においてはGXだけでなくDXの観点もますます重要になってきている。自動車業界の未来に向け今までの輸入電動車の認知向上というフィールドからステップアップし、安全運転等にも寄与することを目指してDXの実現に取り組んでいく。

JAIAの会員企業が電動車をはじめとした最先端の安全・環境技術を備えた世界各国のバラエティに富んだ輸入車を日本のお客さまにお届けできるようにサポートし、日本の持続可能なモビリティ社会の発展に貢献すること。改めて60周年を迎えられたことを皆さまとともに喜び、感謝し、そして未来へ向けて気を引き締めて臨みたい。今後も会員各社、関係の皆さま、そして輸入車を選んでくださる皆さまと手を携え、魅力ある輸入車市場を実現するために尽力していく。

水素技術 チャンスも可能性もある

創立60周年トークセッション

協調領域もっと広げて

白鳳伽藍エリアの食堂では「創立60周年トークセッション」が行われた。正会員によるプレゼンテーションではメルセデス・ベンツ日本の村上茂泰技術部部長やステランティスジャパンの小川隼平フレンチブランドヘッド、フォルクスワーゲングループジャパン、ベントレーモーターズジャパンの遠藤克之輔ブランドダイレクター、ゼネラルモーターズ・ジャパンの上原慶昭プロダクトディレクター、ビー・エム・ダブリューの萩原直樹デベロップメント・ジャパン認証技術シニアマネージャー、ヒョンデモビリティジャパンの七五三木敏幸代表取締役社長が登壇した。

賛助会員によるプレゼンテーションは岩谷産業の中根章技術・エンジニアリング本部カーボンニュートラル設備部長やオオノ開発の朝日健二取締役サステナブル事業本部長兼JOH代表取締役がトークセッションを行った。コメンテーターとして登壇した自動車ジャーナリストの清水氏は「水素は利活用という面で見てもチャンスも可能性も非常にある」と期待感を示した。60周年トークセッションのまとめにはゲルティンガー理事長と清水氏、日刊自動車新聞社の花井真紀子代表取締役社長が登場した。清水氏は「日本は丁寧なすり合わせ技術を持っている。各社が競争領域と協調領域をバランスよくみていく必要があるのでは」と述べ「協調領域はもっと広げることができるはず。実のある協調をしていかなければコストはかさんでしまう」とコメントした。これを受けてゲルティンガー理事長は「各ブランドのキャラクターを理解し合いながら、協調できる部分はありそうだ」と話した。花井社長は「ユーザー目線でみると、選択肢が広がるという部分では未来は明るい」と述べた。